

令和2年度 山形城北高等学校 終業式 校長式辞

2月、3月は慌ただしく過ぎていき、気がつく今日は今年度最後の日となりました。3年生が卒業し、1・2年生だけで集まるのはなんとなく寂しく、新入生の入学が待ち望まれるところですが、2週間あまり経つと365名が入学します。

今年は中学校卒業生数の減少が多く見込まれていましたが、本校に限って言えば、例年になく多くの入学者を迎えることとなり、嬉しい限りです。在校生の皆さんの校内外での活躍ぶり、充実した学校生活ぶりが知れ渡り、希望する中学生が多くなったのだろうと考えています。

さて、この一年を振り返り、体育の授業や部活動での怪我、そして交通事故など、ヒヤリとする場面はありましたが、命にかかわるような大きな事故がなかったことに安堵しています。全国のニュースに目をやると、2月のことですが、岐阜県大垣市で、男女4人が乗る軽自動車が道路脇に転落し、後部座席に乗っていた高校生2人が亡くなりました。運転をしていたのは18歳の少年でした。

また、これは中学生の話ですが、つい先日、浜松市内の女子中学生が福岡市の無職の男に誘拐され、キャンプ場のテント内で、遺体で見つかるという事件もありました。捜査関係者によれば、2人はインターネットを通じて知り合ったとみられています。

それから、去年1年間に自殺した小中高生は、前年の1.4倍に増加し、過去最多となりました。特に高校生の女子が大幅に増加しており、その主な理由としては「病気の悩みや影響」そして「進路に関する悩み」となっています。コロナや有名人の自殺も大きく影響していると思われます。

悩みや不安を感じたら、それを相談するのは大切なことです、SNSだったり、見ず知らずの人だったりすると、思わぬ事件に巻き込まれることも考えられます。身近な人には心配をかけたくないという気持ちは分からないわけではないのですが、SNSは解決どころか、かえって問題を複雑にしまうケースもありますから、本校のカウンセラー室とか、「24時間子どもSOSダイヤル」など、信頼できるところを利用しましょう。

いずれにしても、一度失われた命はゲームをリセットするように元に戻ることはありません。一方で、悩みや不安というのは永遠に続くわけではなく、誰しもが経験する成長の過程でもあるのです。

・・・・・・・・・・・・・・・・

さて、3月1日は卒業式でしたが、東日本大震災からちょうど10年になるというので、「命の授業」と題した式辞を述べました。それについては、本校のホームページに掲載しているので読んでほしいのですが、震災のあった日、皆さんはどこで何をしていたのでしょうか。高校2年生については、10年前といえば小学校1年生ですから、学校にいたか、あるいは下校して家に着くころだったか。もしかすると、年齢的には皆さんが東日本大震災のことをかろうじて記憶しているぎりぎりの



世代なのかもしれません。

その日、私は山形県庁の13階で仕事をしていました。

午後2時46分、これまで経験したことのない激しい揺れが長く続き、同時に停電になりました。県庁は緊急時にバックアップ電源を備えているため、ほどなくして復旧し、誰かがテレビをつけると、そこに映っていたのはヘリコプターが捉えた太平洋の津波の映像でした。それが少しずつ海岸に迫る様子を、私はリアルタイムで見っていました。やがて、その津波は仙台空港をのみ込んだのですが、そこに私の教え子がいることを思い出し、身体が凍り付いたのです。

その教え子というのは、千葉大学の工学部に進んだ女性で、大学4年生になる直前、担任だった私のところに、「大学を辞めて、飛行機の整備士になりたい。」と相談に来たのです。普通であれば、せっかく国立大学に入ったのだからあと一年頑張ったらと助言するのですが、あまりに熱く飛行機への憧れを語ったことと、苦労はするだろうけれど、未来につながる選択はこっちだなと感じ、背中を押しました。

その彼女が、航空整備士の養成学校を出て、働き始めたのが仙台空港の滑走路に直結する整備会社だったのです。津波に飲み込まれるその映像を見た後、メールをしたものの返信はなく、「相談に来た時、止めておけばここにはいなかったのに・・・」と後悔しました。

その3日後だったでしょうか、突然彼女から連絡があり、工場の屋上に逃げたこと、そこで2晩過ごし、ヘリコプターで救助されたことを聞きました。駐車場に停めておいた車には、航空整備士の国家試験を目指して勉強していたノートを置いていたそうで、必死になって自分の車を探し回ったということでした。何とか発見し、泥まみれのノートを洗い、勉強を続け、次の年、会社としては女性初めてとなる航空整備士1級を取得しました。今では、飛行機とヘリコプターの両方を整備する資格を持ち、整備会社のリーダーとして活躍しています。

災害が起こった時、電話が繋がらない、メールに返信するのも大変、その不便さを解消するために生まれたのがLINEです。開くだけで既読マークがつき安否を確認できるLINEは、東日本大震災の3か月後に誕生したものです。また、昨年より世界中に新型コロナウイルス感染症が拡大し、人の移動ができなくなりましたが、ZoomやGoogle Meetといったアプリを使って、世界中の人が簡単につながるようになりました。ワクチンの発見もそうですが、人類は困難なことが起こると、それを克服しようとする知恵が生まれ、500万年もの間、それを繰り返しながら進化を遂げてきたということなのでしょう。

ひとり一人についても同じことが言えて、困難なことは、成長するための絶好の機会とも考えられます。それでも、命を落としてしまっただけではどうにもなりません。最優先されるのは、事故の未然防止と事故発生時における的確な対応です。春休み中、事故なく過ごし、コロナに感染しないよう十分注意しながら、一回りも二回りも大きくなって、4月7日の始業式で元気に会いましょう。

(令和3年3月25日)